

2月22日（日）主日礼拝レジュメ

「贅を尽くした果てに」 伝道者の書2章4～11節

4節以下に具体的に伝道者のしたことが記されている。まずは「邸宅を建て」と言っている。この邸宅はソロモンの宮殿なのか。そうであるなら、

- ① 列王記第一7章1節「また、ソロモンは十三年をかけて自分の宮殿を建て、その宮殿のすべてを完成させた。」

驚くべきは13年かけて建てた宮殿ということであり、2節では「レバノンの森の宮殿」と呼ばれている。長さ約44メートル、幅約22メートル、高さ約13.2メートルの宮殿です。10章12節には「白檀の木材」とあり、その後「このような白檀の木材が入って来たことはなく、見られたこともなかった」とありますように、当時見られなかった白檀で主の宮と宮殿の柱を作った。

次に「いくつものぶどう畑を設け」とあるが、これは富の象徴。

5節「いくつもの庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた」
豪華な庭は、古代中近東では王家と貴族階級の特徴と言われている。

- ② ネヘミヤ記2章8節「そして、宮の城門の梁を置くため、また、あの都の城壁と私が入る家のために木材をもらえるように、王家の園の管理人アサフへの手紙もお願いします。」

多くの必要な木材が調達できるほど、庭や園が広がったことが分かる。6節では灌漑用に「木の茂った森を潤すためにいくつもの池も造った。」7節では、「私は男女の奴隷を得、家で生まれた奴隷も何人もいた。」とあり、また「私は、私より前にエルサレムにいただれよりも、多くの牛や羊を所有していた。」とある。

- ③ 列王記第一4章22, 23節「ソロモン的一天分の食糧は、上質の小麦粉30コル、小麦粉60コル。それに、肥えた牛10頭、放牧の牛20頭、羊100匹。そのほか、雄鹿、かもしか、のろ鹿、そして肥えた鳥であった。」

これだけの量を満たすだけの家畜を飼っていた。8節は、ソロモンの財宝を思い起こさせ、男女の歌い手は、宴会などで歌を披露する人たちで、多くの側女を手に入れたとある。9節「こうして私は偉大な者となった」とは、富を増し加え、持てるあらゆるものを手にした。「私より前にエルサレムにいただれよりも」と但し書きもついている。「私の知恵は私のうちにとどまった」とは、富、楽しみ、贅沢、快楽を追い求める中であつても、決して知恵を失うことがなかったということであり、その知恵を用いて、1節「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」と言われていることの評価、もしくは、そのような人生の結論を得ようとしている。そしてその結論は、11節「見よ。すべては空しく、風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。」ということだった。これは、1章3節「日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」14節「すべては空しく、風を追うようなものだ。」と言われていることの繰り返しだった。

なぜそうなるのか。10節「自分の目の欲するものは何も拒まず、心の赴くままに、あらゆることを楽しんだ。」つまり欲を満たそうとした。も

し欲を満たそうとして、生きようとするなら、空しさをおぼえることになる。欲にはきりが無いから。どこかで完全に満たされない思いが出て来て、空しくなってしまう。

- ④ パウロは、ピリピ人への手紙4章11節「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。」12節「ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」

決して境遇によって振り回されることなく、どんな中でも満ち足りた歩みをするのできる秘訣を心得ていると言っている。これがどんな中でも空しさを感じることなく歩める秘訣。

10節で「これが、あらゆる労苦から受ける私の分であった」と言っているが、これとは楽しむということ。楽しむことだけを追い求めていると、必ず空しくなる。人の心は、ただ楽しむだけでは決して満足しない。誰であっても、この神に出会い、神に立ち返り、神がともにいてくださる人生を送るようになれば、どんな境遇にあっても満足することを学ぶことができ、あらゆる境遇の中、不満を抱かず、空しさを感じることはない。ありとあらゆる境遇の中で、神に感謝し、神をたたえることが、満ち足りた歩みをする秘訣。

4節と8節に共通している言葉は、「自分のために」ということ。いつの間にかすべての労苦が「自分のため」になってしまっていないか。仕事、子育て、家事など自分のためにすべてのことをしていれば、神を信じていても、どこかに空しさが残ってしまう。自分のためだけではなく、神のため、周りの方々のために私たちがすべてのことを始め、一日が始められることの感謝、一日が守られたことの感謝、そして神をたたえて、神を喜ぶなら、必ず満ち足りた歩みをする事ができる。